



美しい花と女性展

意 図

最近「美しいな」と思ったこと話ありますか。

どんな人にでも「美しい」と思う心がありそれはどの時代も変わらないのではないのでしょうか。

また、女性の「美しさ」というのはいつの時代も描かれてきました。しかし西洋と日本でそれぞれ美しいとされ描かれてきた女性像の基準や対象は時代や人によって異なっていると考えます。そこで私は女性の美しさに焦点を当てて「美しい女性」を時代ごとに分け西洋と日本で比較してみようと考えました。

また、『たてば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花』『解語の花』『閉月羞花』『大和撫子』など女性を花に例えたり絵画で女性と花を一緒に描いたり昔から花と女性は繋がっているところがあると感じました。そこで「花」と「女性」どちらも美しいとされているこの二つを結び付け「美しい花と女性展」という企画を考えました。

過去の美しさ、今の美しさを同時に感じ考えることで新たな「美しさ」を発見し、歴史を見返す機会になればと考えます。

内 容

○開催場所 都内の美術館

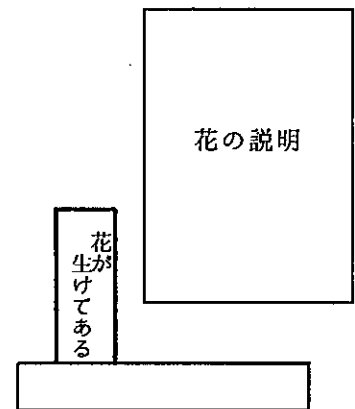
○開催期間 2020年3月23日～5月23日

絵画、彫刻を時代ごとに展示し様々な「美しい女性」と「花」を紹介していく。

作品の隣には作品に描かれている花を展示し、描かれている花の名前や、花言葉、咲く季節を解説する。そして、展示の最後に来場者の方々に作るスクリーンアート の二つからなる。

古代 中世 近世 近代 現代 の五つに時代を分け順に進んでゆく。

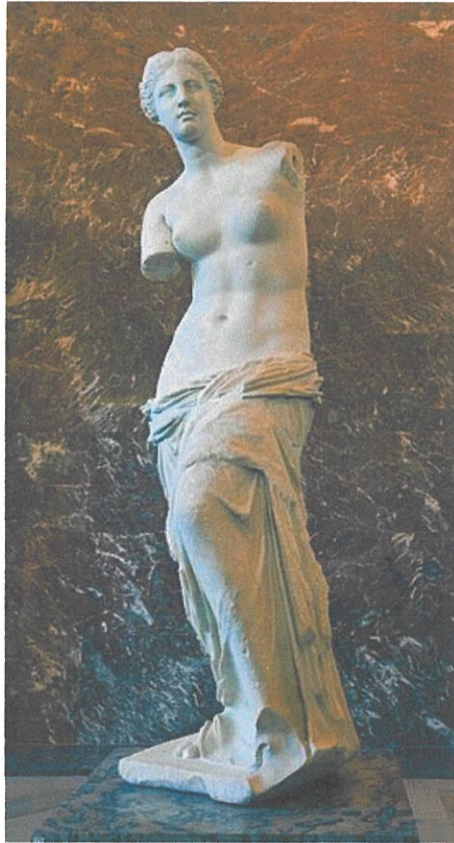
会場は進むにつれセピア色（昔）から段々と元の色（今）に戻っていくようになっている。



1. 古代

まず、会場に入ると部屋の真ん中に「ミロのヴィーナス」が置かれているこの空間にはミロのヴィーナスしか展示されておらず、腕が失われたことで偶然生まれた美しさを鑑賞する

次の部屋には土偶やサモトラケのニケなどの像が展示されている。右に西洋、左に日本の作品を置くことで違いを対比することができる。もちろん正面からだけでなく前後左右好きなどころから作品を鑑賞することができる。像の展示されている壁伝いには薬師寺吉祥天像、法隆寺金堂壁画、源氏物語絵巻が展示されている。法隆寺金堂壁画は最新の技術で当時のものを再現したものを展示する。



ミロのヴィーナス



左：ニケ像 右：遮光器土偶

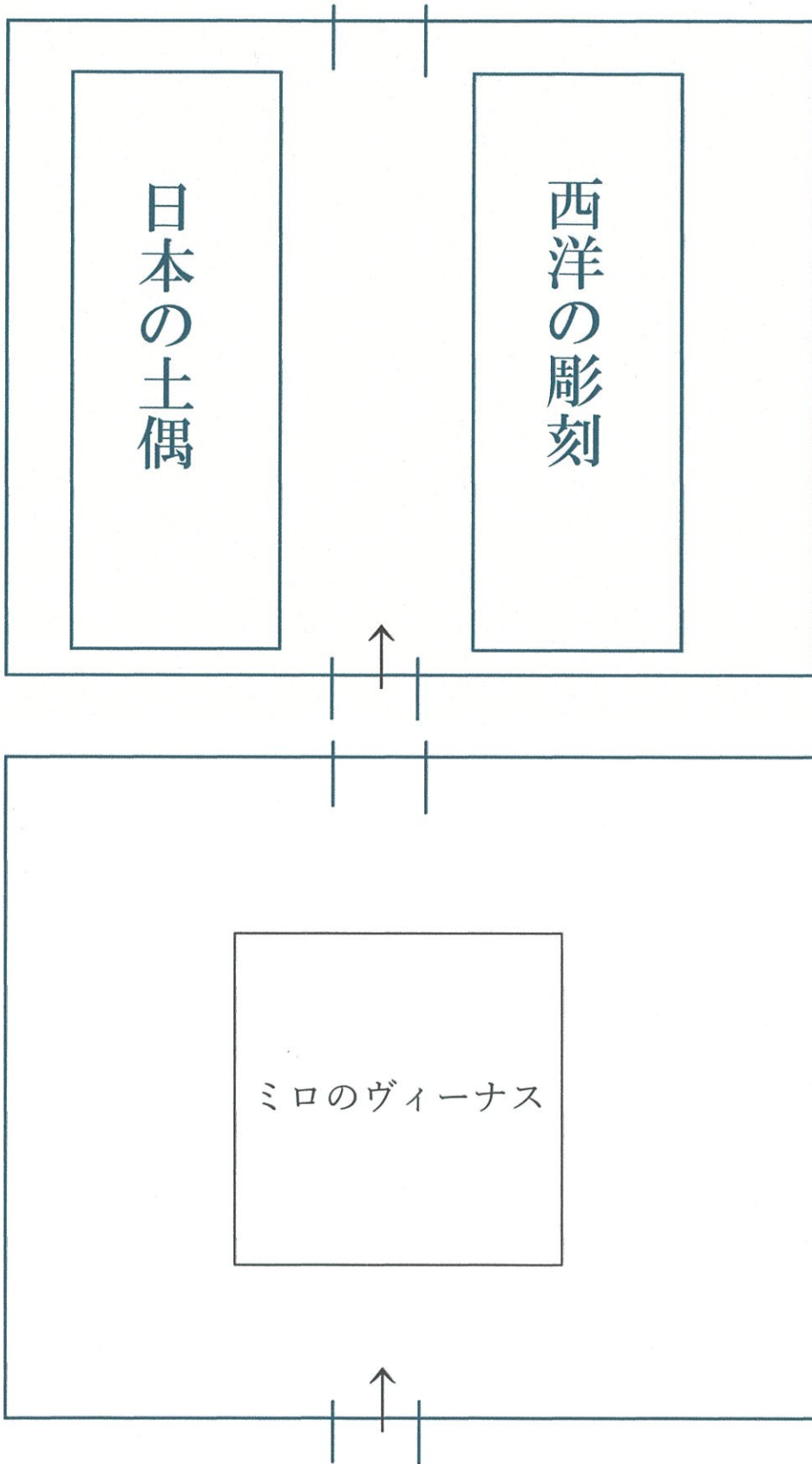


「法隆寺金堂壁画」



左「薬師寺吉祥天皇像」右「源氏物語絵巻」

図



2. 中世

次に中世に移る。目の前にある狩野山楽の「牡丹図」がある。このふすまを開けると中世の世界へと移る。中に入るとまず「彦根屏風」が目に入る。その少し奥には菱川師宣の「見返り美人図」平賀源内の「西洋婦人図」が展示されている。

西洋の作品はドウッチョ・ディ・ブオニンセーニャ「ルチェライの聖母」ピサネロ「エステ家の姫君の肖像」を順に展示する。また、ゴシック様式の建物として有名な「シャルトル大聖堂」のステンドグラスを再現する。



狩野山楽「牡丹図」



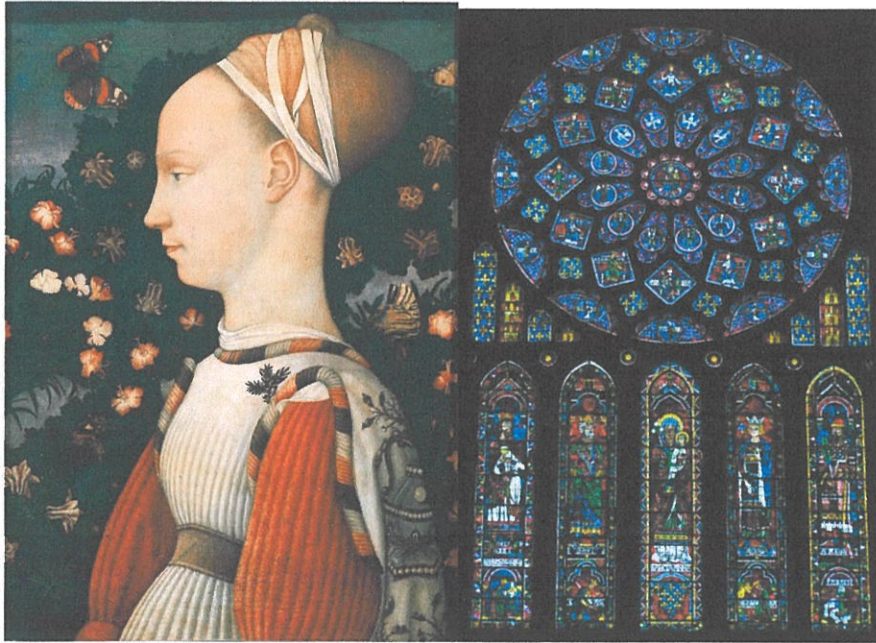
「彦根屏風」



左「見返り美人図」右「西洋婦人図」



ドウッチョ・ディ・ブオニンセーニャ 「ルチェライの聖母」



ピサネロ 「エステ家の姫君の肖像」 シャルトル大聖堂

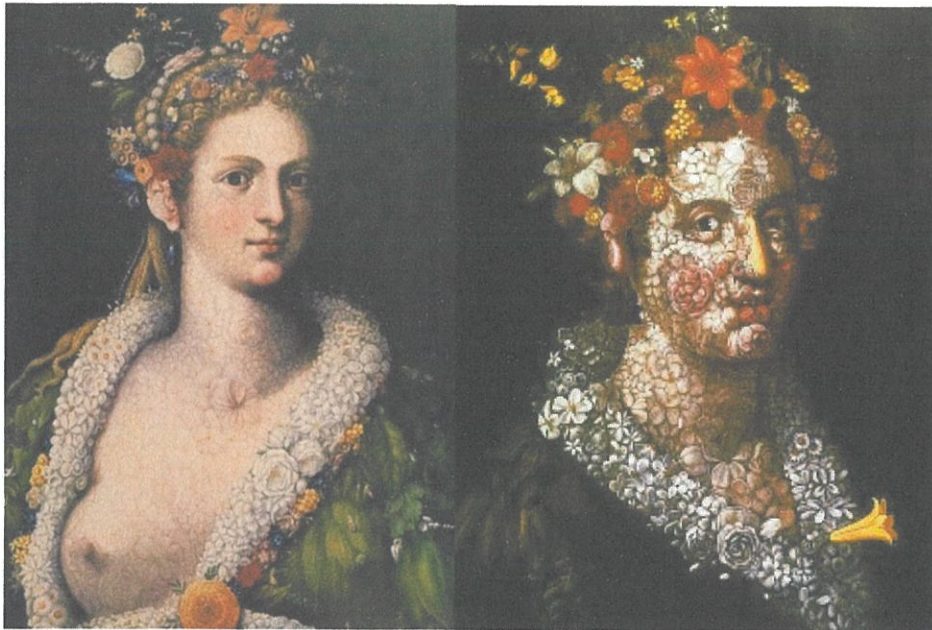
3. 近世

ステンドグラスの展示を抜けるとそこは古代ギリシャやローマの人間中心の文化を再生させた近世の始まり。そこに最初に飛び込んでくるのは ボッティチェリの「春 (プリマヴェーラ)」である。美しい女性、沢山の花。今回の展覧会にふさわしい作品だ。次に果物や野菜などをきめ細かく寄せ集め、肖像画を描いたジュゼッペ・アルチンボルドの「フローラ」だ。「フローラ」と題される作品は何点か製作されておりそのうちの二つを今回展示する。「春 (プリマヴェーラ)」、「フローラ」どちらも花、女性と今回の展覧会の目玉となる作品に打って付けである。

日本の作品は二人の浮世絵師を紹介する。一人目は、浮世絵というとまず思い浮かべる木版多色刷りの錦絵誕生に決定的な役割を果たし、後の浮世絵の発展に多大な影響を及ぼした鈴木春信。二人目は誰もが知っている喜多川歌麿である。どちらも女性を描いた浮世絵師である。



ボッティチェリ「春 (プリマヴェーラ)」



左右どちらもアルチンボルド「フローラ」

次の部屋に移ると近世で有名な芸術家たちの描いた女性や花に関する作品が展示されている。



左：ドナテッロ「ダヴィデ」 右：ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ『聖女テレージャの法悦』



鈴木春信「中納言朝忠（文読み）」 喜多川歌麿「寛政三美人」「江戸の花 娘浄瑠璃」

4. 近代

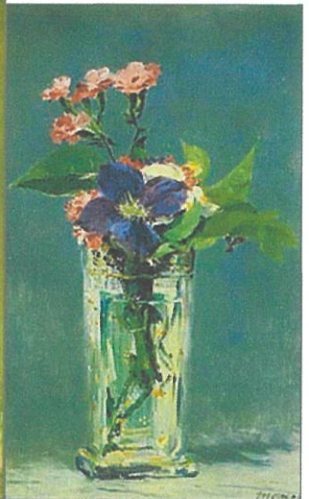
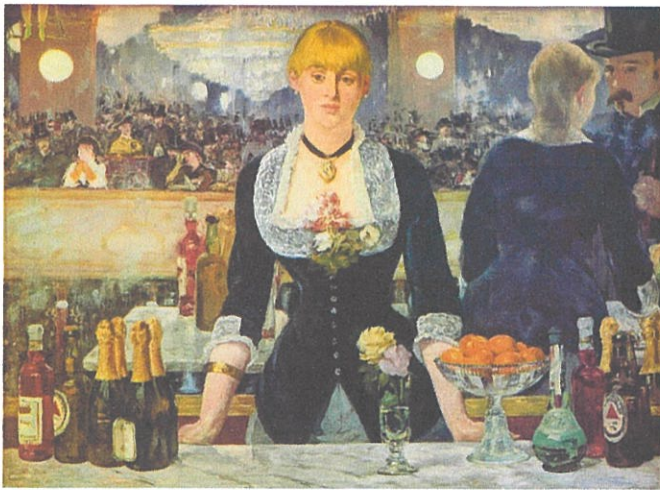
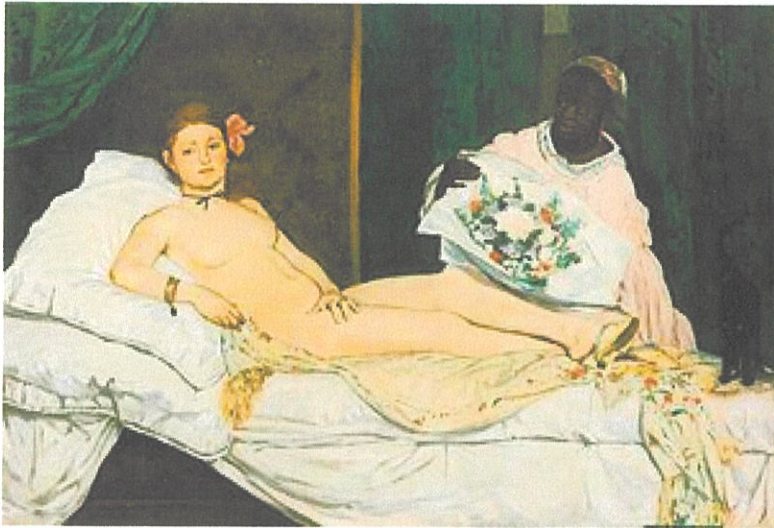
この時代の西洋は民族や、地域の固有な文化や歴史、個人の感情や想像力などを重視し始めた近代へと移る。一方日本は、明治維新などの近代化により西洋画法を導入した洋画が成立した。

西洋は、女性をメインに花を描いたアルフォンス・ミュシャや、当時世間を騒がせたエドゥワール・マネ、ジョンエヴァレット・ミレー、印象派の画家として有名なクロード・モネ、メアリー・カサット、アントニオカノーヴァを展示する。

日本は、「湖畔」で有名な黒田 清輝、日本近代洋画の牽引者藤島 武二、荻原礫山、日本画の革新運動の一翼を担った竹内 栖鳳、竹久 夢二を展示する。



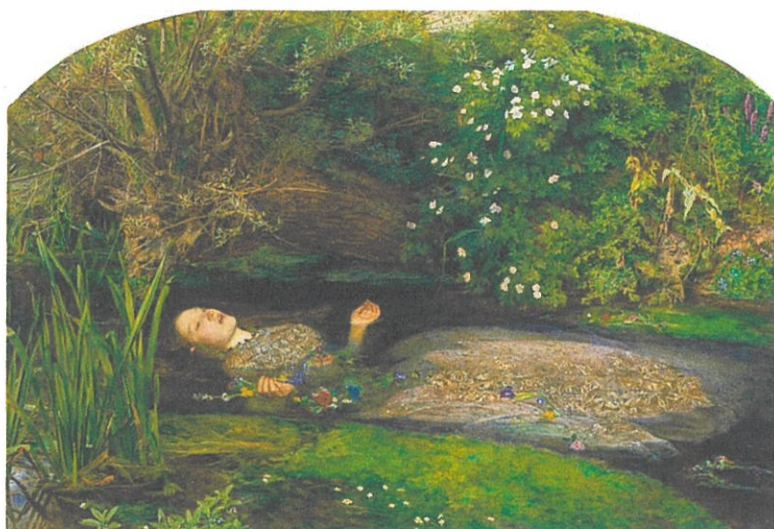
上アルフォンス・ミュシャ左から「春」「夏」「秋」「冬」下「ヒヤシンス姫」



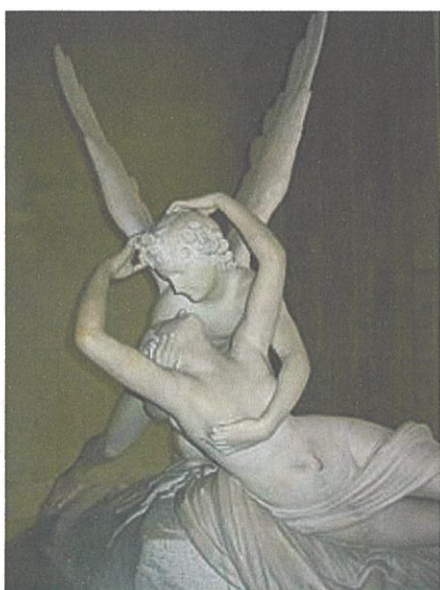
左上から順にエドゥワール・マネ「オランピア」「すみれのブーケをつけたベルト・モリゾの肖像（黒い帽子のベルト・モリゾ）」「フォーリー・ベルジェールのバー」「胸をはだけたブロンドの娘」「ガラス花瓶の中のカーネーションとクレマティス」



モネ「散歩、日傘をさす女性」「ひなげし」



ジョンエヴァレット・ミレー「オフィーリア」



アントニオカノーヴァ「アモールとプシケー」



メアリー・カサット「お茶」「子供の入浴」



黒田 清輝「湖畔」



藤島武二「アルチショ」「匂い」



萩原礫山「女」

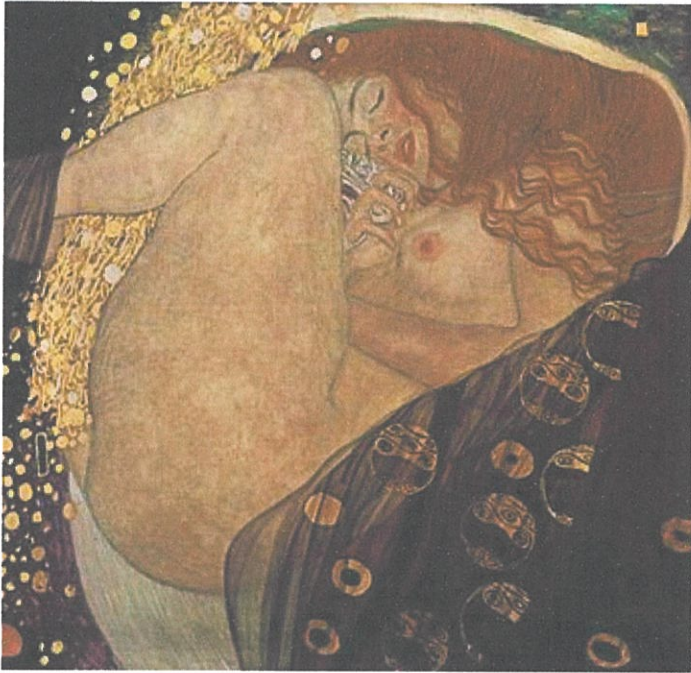


左 竹内 栖鳳「アレタ立に」 右二つ 竹久 夢二「女十題 舞姫」

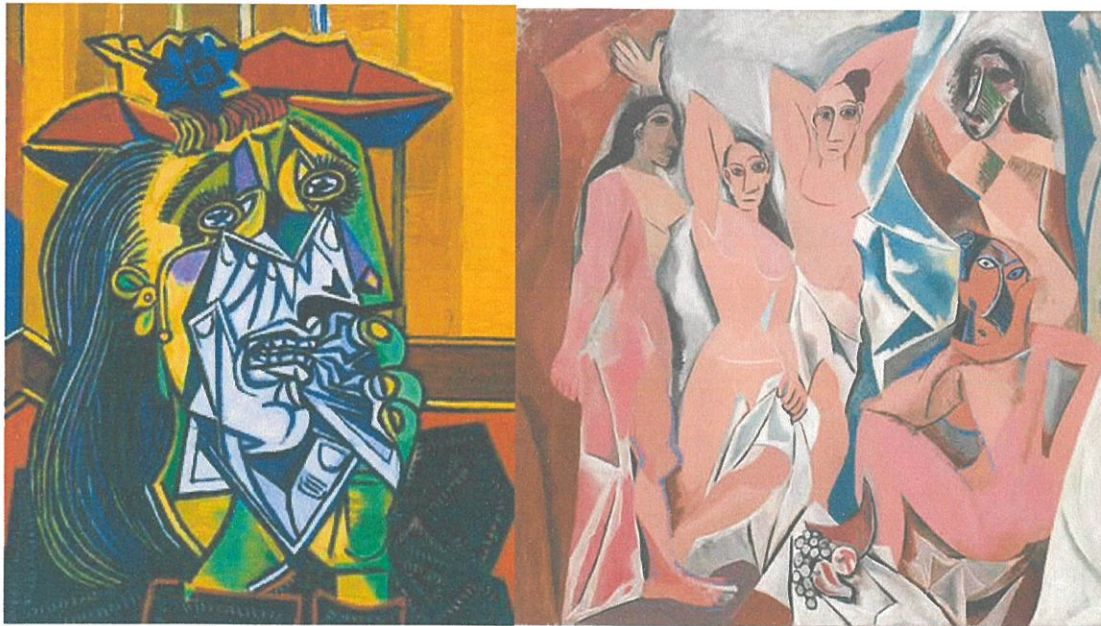
5. 現代

現代芸術は豊かで多様な表現が生まれた。

甘美で妖艶であると同時に衰退や生死が感じられるグスタフ・クリムト。作風が目まぐるしく変わり、それぞれの時期に名がついているパブロピカソ。大胆な色使いが特徴のアンリ・マティス。シュールレアリスムで有名なルネ・マグリット。世界的に評価されている奈良美智、現役の人形作家小池緋扇を紹介する。



グスタフ・クリムト「ダナエ」



ピカソ・「泣く女」「アビニヨンの娘たち」



アンリ・マティス「眠っている女性と静物」「赤い部屋」



ルネ・マグリット「世界大戦」



左 奈良美智「Untitled」 右 小池緋扇

6. 参加企画

「私の美しいと思うもの」

展示コーナーを抜けると目の前に人より少し大きい白い壁がある。その横にはテーブルが置いてあり、紙とペンが設置されている。その紙に「私」が美しいと思うものを文字で書き、専用の機械で読み込むと文字が色づいて絵となり、壁に張り付く。様々な人の「美しい」でできた「美しい女性と花」の絵画が映し出される。

映し出される絵画の種類は複数あり、様々な演出が楽しめる。



例：美しいと思うこと『花』→モノクロだった上の画像の『花』の部分が色づく。

美しいと思うこと『青色』→モノクロだった上の画像の『青色』の部分が色づく。